

扇端の交わり

海と山を結ぶ「漬け床」の街



南富山には人と人、食と農をつなぐ3つの交わりが眠っていました。それは「扇端」「鰯街道」「太郎丸の杜」です。扇端とは常願寺川と神通川が形成する二つの扇状地の端のことで、豊かで厳しい自然と共生してきたことを意味します。南富山を通る県道43号線と317号線は鰯街道と呼ばれ海と山、物資と人の交流の場でした。そして、県立富山高校を囲む太郎丸の杜は防災という面でも景観としての面でも南富山のシンボルであり、このまちを100年以上見守り続けています。

しかし、現在では鉄道軌道と自動車交通にとって不便な細街路によってまちは周囲から孤立し、宅地化が無秩序に進んだことでまちと自然の関係が希薄になってしまっています。更に、こうしたことから周辺のコミュニティとの関係が疎遠なまち割りになってしまいました。

そこでかつての交わりを現代的な生活環境や制度に置き換え、新たな交わりを加えることで南富山の文化や生活を後世に伝えるまちづくりを提案します。

人と人、食と農を繋げる取り組み

- ・まち土間(トランジットモール)の整備
- ・パブリックキッチン(子ども食堂)の運営
- ・雁木デッキによる歩行空間の再編
- ・漬け床によるコミュニティの醸成
- ・雁木デッキと漬け床の防災面での活用

など

これらの取り組みで、以前から存在した近隣コミュニティと地域の魅力に惹かれて集まったコミュニティが交わります。そして、生き甲斐を感じつつ防災・福祉面にも強い、自然に囲まれた暮らしやすいコンパクトシティが構築されます。

そして漬け床文化が根付くと市民が独自の工夫をはじめます。同時に発行食品の基礎研究や医療への応用が検討されるなど、発酵させるという行為がこのまちに新たなイノベーションを巻き起こします。